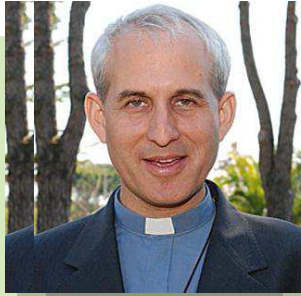


CAGLIERO 11

カリエロ 11

サレジオ会宣教ニュース N.72 - 2014年12月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



兄

弟の皆さん、友人の皆さん、
アフリカのある国で、一人のお年寄りの婦人が、年老いた聖なる宣教師のことを評していたの思い出します：「お髭は白くて長いのに、目は子どものようなのよ」。実際、そのとおりでした！ 宣教師は、「子どものようにならなければ」なりません。初めからすべてを学ばなければなりません：話すこと、あいさつ、食べること、服を着ること。

こうして少しずつ、宣教師の魂と目は、子どもの魂、目のようになります。まさにそれはイエスの望まれたことです。「子どものようにならなければ、天の国には決して入れない！」

そのため、宣教師は、幼子イエスの目を観想することに特別な魅力を体験します。幼子イエスは、あらゆる民族、文化、国の人々のため、小さなものとなりました！

爽やかな、幸いな2014年のクリスマスをお祈り申し上げます！「子どものようになる」時です。幼子イエスの澄んだ目で見る、そしてその目を、宣教の学び舎とする時です。観想する宣教師になることを学びましょう：「心の清い人は幸いです、その人たちは神を見るだろう！」

感謝！

J. Basanes

宣教顧問
ギジェルモ・バサニェス神父

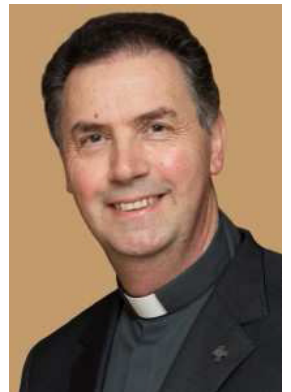
私たちの会の宣教活動に貢献し、 ドン・ボスコ生誕 200 周年を祝おう

「……私は単純明快なことを述べたいと思います：宣教の次元は、私たちのアイデンティティーの一部です、そして文化的多様性、多文化と文化交流は今後の6か年に私たちが目指して歩むべき豊かさです。……」

教皇は、すべての民への福音宣教を呼びかけており、私たちは、常に自らのアイデンティティーのうちに自分たちの姿を認めるため、私たちの会の宣教的性格に目を向けます。ドン・ボスコは、サレジオ会が確固とした意識をもって宣教する会であることを望みました。1875年、ドン・ボスコは最初のサレジオ会員の小さな集団の中から、アメリカ大陸に行くべき10人を選びました；亡くなるまでにすでに10回に及ぶ宣教派遣を行っており、帰天したときには、すでに153名の会員がアメリカ大陸にいました。それは1888年の年鑑によると、当時のサレジオ会員の2割に近い人数です。

この宣教のアイデンティティーは、歳月とともに保たれ、培われ、特別総会が特別な呼びかけを行うに至りました。ドン・ボスコ生誕200周年に入ろうとする今日、ドン・ボスコへの生きた敬意を表しながら、その呼びかけを新たにしたいと思います：『特別総会はすべての管区に、人材において最も貧しい管区にも呼びかけます。最高評議会の招きに応え、私たちの創立者の勇気ある模範に従い、神の国を告げ知らせる働きに、決定的なあるいは短期的な形で、それぞれの人材を通して貢献するよう呼びかけます。』（特別総会文書477）

親愛なる会員の皆さん、この呼びかけが、私たちの会の現状において今もそのまま意味を持つものであると、私は心から信じています。生誕200周年にドン・ボスコに敬意を表すと言うのは、空疎な祝いの言葉を述べているのでも、ただ統計のためでもなく、私たちの会の大きい豊かさはその宣教の力であること、福音宣教の事業において、私たちが最も必要とされる場にいることができることであると—どこにいようと私たちのあらゆる働きは実に有効ではありますが—私が心から信じているからです。この思いは、第27回総会に満ちている空気でもありました。



総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父

(最高評議会報419 総長書簡より)

「カリエロ 11」読者の皆様
祝福に満ちたクリスマスと良い年をお迎えください



宣教の喜び：ブルガリアの社会の最も弱い立場にある人々のために働いて



私

の宣教師としての召命は、2001年に志願院にいたとき、マルタ出身の年輩の宣教師、カルメロ・アツタール神父を補佐する機会に恵まれたとき、実際に始まりました。カルメロ神父はよく働く宣教師でした。私はその修道者としての献身的な姿に心を打たれました。しだいに、宣教師になりたいという望みが私の内にも育まれました。掲示板に貼られた、宣教師たちの働いている写真や、折にふれて宣教師の訪問を受けたことは、私の宣教への熱意をさらに強めました。志願期を終えて間もないころから私は何度も何度も自分の望みを管区長に話しましたが、ポストノビスが終わっても管区長は私を宣教に送り出そうとしませんでした。

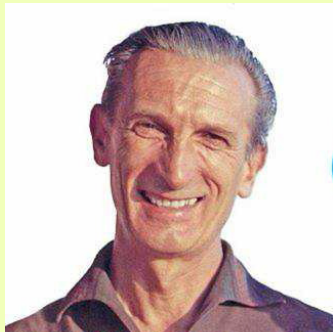
私は宣教師になることをあきらめませんでした。それ以上、長上に話さないことにしました。その代わりに、神様のみ旨と計画に自分を明け渡すことにしました。「私が宣教師になることを神様が望みなら、きっと私を導き、道を示してくださいにちがいない」。ある日、管区長が私を実地課程と神学の勉強のためにイタリアに送ることを決め、驚きました。幸いイタリアで、私は当時宣教顧問だったヴァツラフ・クレメンテ神父に会いました。クレメンテ神父と話し、宣教師になるための識別を始めるようにと勧められました。その後、私は総長に宣教師志願の手紙を書き、2012年、総長は私をブルガリアに派遣しました。

私は新宣教師養成コースに参加しました。養成コースでは、現代の宣教師であるための新たなものの見方をするように助けられました。現代では、生活のあかしが第一に必要になります。ある状況では福音を告げ知らせるのが困難な場合があり、別の状況では、福音への無関心さえあるかもしれませんが、いずれの場合も、自分の生活を通してキリストをあかしするよう、私は呼ばれています。今日宣教師であることは、ただ福音を人々に語ること、あるいは貧しい国に行って人々の世話をすることだけでなく、私たちの生き方を通してあかしをすることでもあるのです。なぜなら、互いに思いやり、共同体として共に暮らし働くことはすでに、愛の福音の力強いメッセージとなるからです。

私はブルガリアで宣教師として幸せです。さらに私に喜びを与えてくれるのは、私たちが貧しい人々のため、またブルガリア社会の最も顧みられない人々 — ジプシーのためにに行っている事業です。私がブルガリアにいたのは実地課程の間だけでしたが、司祭として戻り、奉仕できる日を心待ちにしています。ブルガリアの私たちのため、教会のために、明るい未来が待っていると感じます。ジプシーの人々のためのミッションは大きな可能性を秘めています。しかし、そのほかに、教育とキリスト者の養成の分野でも可能性を探る必要があるでしょう。



インド出身、ブルガリアの宣教師
ドンボール・シルワ神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

尊者アッティリオ・ジョルダニー(1913 - 1972)は家庭の父、オラトリオのアニメーター、サレジアニ・コオペラトリー会員でした。家族と共に宣教師として移り住んだブラジルで生涯を終えました。あたかもドン・ボスコの手で形づくられたような信徒であった彼は、私たちに勧めます：「人生・生活の中で、私たちが行うべきことについて、それほど語る必要はありません。説教はあまり必要ではなく、大切なのは、何を行うかです。私たちが信じていることを、生き方によって示す必要があります。説教すべき教えはありません。教えは、私たちの生き方です。」



サレジオ会の宣教の意向

アフリカのサレジアニ・コオペラトリーのために

コオペラトリーが、各自の置かれた場で真の宣教者となれますように。

サレジオのアフリカ - マダガスカル地域を構成する 38 国には、すでに 1500 名以上のサレジアニ・コオペラトリー会員がいます。会員たちは少しずつ自分たちの召命の意識を高め、教育と福音宣教においてより重要な役割を果たすようになっていきます。ベネディクト十六世の勧めの言葉は、彼らにも呼びかけられています：「また、皆さんが、政治、文化、芸術、メディアの分野、さまざまな団体などで積極的な、勇敢な存在であるようにと勧めます。そのような存在となることを躊躇したり恥ずかしいと感じたりしないでください、誇りに思い、共通善への貴重な貢献となることを意識してください！」(使徒的勧告「アフリカの使命 Africae Munus」131)

